九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

近代日本における浄土教思想 : 清沢満之の「他力門哲学」を基軸として

脇, 崇晴

https://hdl.handle.net/2324/1654596

出版情報：九州大学, 2015, 博士（文学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（3）

（様式６－２）

氏　　名	脇　崇晴
論　文　名	近代日本における浄土教思想 ―清沢満之の「他力門哲学」を基軸として―
論文調査委員	主　査　　九州大学　　准教授　吉原　雅子 副　査　　九州大学　　准教授　飯嶋　裕治 副　査　　九州大学　　教授　　岡野　潔 副　査　　大谷大学　　教授　　福島　栄寿

論　文　審　査　の　結　果　の　要　旨

本論文は、明治期の宗教哲学者であり浄土真宗大谷派の僧侶である清沢満之の思想を明らかにしようとするものである。従来の研究では、清沢の思想は初期の「宗教哲学」と晩年の「精神主義」とに分断して考えられ、精神主義は直ちに親鸞思想と同一視されるか、親鸞思想と全く異なるものだと論じられてきた。本論文はそのいずれの立場からも距離を置き、清沢の思想を一貫したものととらえる視点から、親鸞と清沢の思想的な異同を見極め、浄土真宗や浄土教の伝統がどのように受け入れられ展開されたのかを論じている。

第一章では浄土教思想の根幹をなす阿弥陀仏に対する清沢の理解が検討される。清沢においては、阿弥陀仏は誓願の力を通じて能動的に現世で救済の働きをする存在とされ、清沢の思想があくまで来世での安楽を前提とするそれまでの浄土教思想とは異なっている点が確認されている。

第二章では浄土とは何かという問題が論じられる。清沢において浄土とは阿弥陀仏の清浄な心によって生じた仏国土であり、その心が「信」（他力の信心）として与えられることによってわれわれは現世での安住を得ること、ただし心は浄土に住み遊びつつも穢土にあるこの身は煩悩に深く囚われている、という二元的な緊張関係があることが指摘される。

第三章では念仏に焦点が当てられる。清沢において念仏とは、「自力」の修善の努力と不可分の緊張関係の中で「他力」の信心が深まることで、阿弥陀仏への感謝として発せられる念仏（他力の称名念仏）であると論じられている。

第四章と第五章では清沢における浄土教思想と儒教思想との関係が論じられる。第四章では「至誠」に着目し、清沢の言う至誠の心は本来的には仏のものであり、「他力回向の心」として仏から与えられたものであるとされ、至誠の心が彼の他力信仰の核心となっていることが示されている。

第五章では、再度、清沢の思想上の変化という問題を提起し、考察が加えられる。清沢は、「天命」と「如来」が共通の構造をもっており、それに自らをゆだねることによって安住が得られると考えたとして、清沢晩年の精神主義における「現在の安住」という思想の形成が説明される。

清沢の思想と親鸞思想との関係は、これまで真正面から論じられてこなかった課題であり、これに取り組んだ姿勢は高く評価できる。論旨は明快であり、叙述は丁寧かつ緻密である。儒教思想の視点も組み込みつつ、一貫した浄土思想として清沢の思想を位置づけた点で独自性もある。清沢の思想を内在的に解釈し浄土教史に位置づけた本論文は、日本思想史研究に大きく貢献するものと考えられる。以上の理由により、本調査委員会は、論文の提出者が博士（文学）の学位を授与されるにふさわしいと認めるものである。